

小谷源之助・仲治郎兄弟をとりまく人びとと渡米の背景

愛沢 伸雄 (NPO 法人安房文化遺産フォーラム 共同代表)

19世紀末、根本(南房総市白浜町)の海産物問屋「金澤屋」の小谷源之助・仲治郎兄弟は、米国カリフォルニア州モンレーで器械潜水を導入して採鮑に成功し、乾鮑や缶詰などの事業に成功したパイオニアといわれる。

これまで水産学者や米国の歴史学者らの先行研究に学ぶことが多く、彼らの渡米前のことはほとんど知られていなかった。しかし近年、明治期の古文書を大量に発見し解読調査をするるとともに、日本政府から米国に派遣された椎原廣男が1908年(明治41)に提出した公式報告書「米国に於ける本邦採鮑業者の状態並びに経営法に就いて」を見つけ、その実像が明らかになった。

私はこれらをまとめ、「明治期に渡米した房総アワビ漁師たちの源流～小谷兄弟と金澤屋の人びと」という論文を執筆した。現在は、日米両国における先行研究の経緯を分析するとともに、和歌山移民との交流や共生に関わる調査を進めている。本稿では、別の角度から、渡米アワビ漁師の背景を探ってみたい。

1. 房総半島南端と沿岸航路の人びと

房総半島南端部の外房沿岸域は、温暖な海洋性の気候であり、海岸段丘や岩石海岸、砂浜海岸、海蝕洞窟や岩が削られた入り江などが多い。古代からアワビやイセエビ、海藻などの磯根漁業が盛んであり、南からの黒潮と北からの親潮が出会う豊かな漁場であった。

1614年(慶長19)の房総里見氏改易後、江戸湾口部を含む半島南端部は、幕府の直接的な支配地となった。太平洋に面する布良や根本、滝口、白浜、千倉などの沿岸域は、大都市江戸を支える海産物供給地であった。

幕末には砲台などが設置される海防の地であるが、その動乱期においても安房と江戸の交流は盛んであった。明治期にかけては重要な海上

航路が発展して保養地となり、人びとの往来や文物の流入はさらに増えていった。

里見氏の改易により家臣らは、安房内外や江戸などに離散していく。しかし、明治期までも続く血縁地縁による支援や情報を共有する強固なネットワークをつくっていったと思われる。こうした背景のなかで、広く世界に関心を持ち、社会に影響を与えた安房の人物4人に注目したい。

▷ 森^{せいきちろう}精吉郎

1878年(明治11)4～7月、根本の森精吉郎は横浜の増田萬吉に委託して、器械潜水によるアワビ漁の試験操業を行った。増田は日本における器械潜水の始祖である。

『長尾村誌』(恩田利用著・1917年)にも、「…潜水器械の使用にあり潜水業の嚆矢は横濱の人増田萬吉にありといふ明治九年森精吉郎同人に依托し採鮑に試みしに其利舊に倍するを知り砂取と共同し十二年一月採鮑営業出願全年二月八日認可せられたり…」と記されている。

精吉郎は、森惣右衛門ら森一族をはじめとする支援者とともに村民を動かし、増田の革新的な技術を取り入れる採鮑業の実験に取り組んだ。精吉郎が村民の人望を集めていたからこそ、村をあげて先駆的な取り組みが成功に導かれていったと思われる。

根本は器械潜水採鮑業の先駆けの村として有名になった。1881年(明治14)に千田、1882年(明治15)に布良が器械潜水採鮑を開始し、またたく間に全国各地へ広がっていった。

精吉郎は、1846年(弘化2)に生まれ、1874年(明治7)の根本小学校開設時に算術の教員であり、1895年(明治28)から1899年(明治32)に亡くなるまで村会議員を務め、さらに根本小学校の学務委員でもあった。

教師の森精吉郎が示した器械潜水の試験操業

は、外国の科学技術を取り入れた実物教育となり、11歳の小谷源之助は感動して見ていたことだろう。

源之助の父清三郎は、金澤屋の入り婿であり、元の名は森大吉という。兄の森惣右衛門は器械潜水の支援者であり、精吉郎とは一族であった。

なお、里見氏の情報をまとめた『安房志』（斎藤東湾著・1908年）では、根本の森務吉という人物を「祖先森杗之助義祐と稱し、先代を儀兵衛と云…」と紹介している。根本の西墓地にある「森儀平家」の墓は、儀兵衛に通ずると思われ、墓碑のなかに杗之輔という名もあることから、里見氏家臣団の一人と推定される。

森家一族と思われるその墓域には「木村屋」という屋号があり、墓碑には「了知源底居士 明治三十二年五月十一日 俗名精吉郎行年 五十四才」という名がある。

また、この墓域には森家大屋という家名の大きな墓石があり、墓碑には森惣右衛門の名が刻まれている。『長尾村誌』に記載のある江戸期の根本村名主森惣右衛門と思われる。

▷ 福原 有信ありのぶ

資生堂創業者の福原有信は、1848年（嘉永元）に布良や根本に近い松岡村（館山市）で生まれた。幼少時より漢方医の祖父に薬草学などを学び、17歳で医師をめざして上京。西洋医学を身につけ、医薬分業を提唱し、日本初の洋風調剤薬局を開業した。

また、帝国生命保険会社、安房銀行の創業にも関わり、広く世界を見聞して政財界の人脈を築くとともに、里見氏家臣の血筋をひくネットワークにも関わっていたという。

根本村名主の森大屋家とは親戚で、一族の小谷清三郎とも親しく、金澤屋との取引があった。

▷ 鳥山 確齋とりやま かくさい

鳥山確齋は、1819年（文政2）朝夷郡大川村（南房総市千倉町）に生まれた。網元出身の思想家であり、吉田松陰に影響を与えたといわれる。

里見氏につながる新田氏の末裔であり、幕閣

に意見書を出せる立場にあった。江戸の京橋桶町に蒼龍軒という私塾を開いており、この塾には21歳の松陰が寄宿していた。松陰は、ペリー来航の際に密航を企てるが、未遂に終わり獄に繋がれた。このとき鳥山は、獄中の松陰のために義援金集めに奔走したという。松下村塾を主宰し、高杉晋作や伊藤博文、山縣有朋らの人材を育成していった松陰の理念には、激動の時代を生きる指針を鳥山確齋から学んだといわれる。

38歳という若さで病死した鳥山は、後に安房先遣偉人の一人として顕彰の会がつくられた。小谷仲治郎が学務委員を務めていた七浦小学校にも顕彰碑が建てられ、語り継がれてきた。

▷ 浅沼 藤吉とうきち

1854年（嘉永5）、根本の隣の滝口村（南房総市白浜町）に生まれた浅沼藤吉は、日本初の写真材料専門店「浅沼商会」の創業者である。福原有信の4歳下で、親戚筋といわれる。

江戸に出て、薬種問屋の手習いから18歳で起業した苦労人である。海外の高価な写真機であっても、安価で良質な国内産印画紙の需要が増えるを見越して、積極的に海外からの情報や新技術を導入した。革新的な製品を次々と生み出して。1900年（明治33）パリ万博に出品し表彰されている。

2. 海産物問屋「金澤屋」と器械潜水採鮑業

『房州避暑案内』（山崎房吉著・1892年）などには、「…復期一体ニ潜水器械ヲ使用シ鮑ヲ採リ清國輸出ノ乾鮑ヲ製造シ就中布良ヨリ白濱ニ連ル海面最モ盛ナレバ…乾鮑ハ御帰京ノ御土産ニハ至極上品ノ物…」とあり、器械潜水による採鮑業だけではなく、乾鮑を製造して清国へ輸出していることを紹介している。清国への輸出品である「乾鮑」が安房の高級な名産品や御土産とすると、地元の海産物問屋金澤屋への注文も増えていたのであろうか。

源之助・仲治郎の父である小谷清三郎（1845－1910）は、根本村の名主森惣右衛門の出身で、金澤屋の長女・小谷たよ（1849－1927）の入り婿

となった。海産物問屋の実業家というだけでなく、根本村の村会議員や根本尋常小学校の学務委員などの要職を務めていた。森大屋家の兄森惣右衛門は、明治期に入っても村政や漁業において村民をまとめる立場にあり、金澤屋に婿入りした清三郎も森大屋家の一員として村政に関わっていた。

小谷たよは12歳で先代当主の父を亡くし、館山の商家から嫁いだ母を支えながら、18歳で清三郎と結婚するまで金澤屋の経営を手伝っていたと思われる。しかし、その母も2年後には亡くなった。金澤屋についての資料は、小谷家の墓石に刻まれる「得成正覚信士 無相得海信女 金澤屋始祖也」だけであったが、他の墓石を調査し、1827年（文政10）や1859年（安政6）に没した、たよの曾祖父母夫妻が初代「金澤屋」清三郎とわかった。他の墓石の解読も進み、たよの夫清三郎は4代目と特定できた。代々「清三郎」を襲名しているが、2代目清三郎は早世し、その妻ふきは長寿であり、1897年（明治30）に91歳で没している。時折、書簡に登場してくる老母とは、祖母ふきのことと推察した。たよは10人（2人は早世）の子育てをしながら、金澤屋の経営に奮闘していた。祖母ふきは、その孫娘を裏で支えていたと思われる。

根本村から始まった革新的な器械採鮑業は瞬く間に全国に広がった。清三郎や11歳の長男源之助は、横浜から来た増田萬吉が、海外に精通し、英語を使いこなす姿に、強烈なインパクトを受けたであろう。海外技術の凄さを目の当たりにして、外国語を学ぶ重要性を強く認識したと思われる。

西南戦争が終わり明治政府の施策が変わりつつある時期、福沢諭吉の書籍が新時代の建設を呼びかけた。学費は高いが、若者の英語教育などに力を入れる慶應義塾に関心をもったと推察される。先述の福原有信や浅沼藤吉らの活躍もあり、将来の金澤屋のことを考えた清三郎は、長男源之助に高等教育を与えることを決断した。

源之助は1880年（明治13）に慶應義塾幼稚舎

に入塾する。清三郎が源之助に宛てた書簡には「福沢先生に相頼み満三ヶ年余りも入ジク〔塾〕致サセ」「満五ヶ年モユーマーナル学校ニテ多クノ御人ト交際致シタル事故、何レノ地ニカ商法ノ手續キ等致シ居ル事ト、後日ヲタノシミニ」と記されている。清三郎が伝手を頼って福沢諭吉に会い、直接入塾を依頼したと読み取れる。その伝手は、森大屋家と遠縁にあたる福原有信であったかもしれない。

親元を離れ寄宿舎生活となり、英語教育をはじめ3年間で築いた人脈は、後に渡米していく足場になっていったであろう。その後に商法学校や東京学館で学んだこともわかり、経営の基本的な実務的知識や技能を身につけていった。

清三郎は、実家の森大屋家とともに器械採鮑業と乾鮑製造販売を進めるために、源之助が英語力を駆使して貿易交渉をおこなう人材になり、慶應義塾の人脈を使った新しい金澤屋経営を願っていったと推察する。

今回発見された書簡によって、金澤屋の経営の一部が浮き彫りになった。金澤屋の資金支援者の一人から、「・源之輔〔助〕君ニも佐土〔渡〕地ニ於而大勝利、從而獲モ頗ル多シト、単独ニシテ遠征ヲ試ミルノ勇氣アルスラ、実ニ感激之至ニ有之候処、彼地〔〔欠損〕〕之商人ヲ降伏セシメ…」と送られてきた。源之助が一人で佐渡に乗り込んで商売上で大きな成果を上げた勇氣に感動した、という知らせである。ここで始めた商取引や築いた人間関係が、源之助の人生や金澤屋にとって大きな転機になったといえよう。

3. 佐渡・森^{ちき}知幾と「金澤屋」の事業拡大

金澤屋にとって、佐渡島や秋田能代などで進めた器械採鮑業や乾鮑製造業による事業拡大は、大きな成功を収めた。書簡から1890年（明治23）頃より、清三郎や源之助、仲治郎らは新潟の佐渡や粟生島（粟島）に出向き、器械採鮑業と乾鮑製造業の指導はじめ、サメやイワシ、コノシロなどの操業をしていたことがわかった。

書簡だけでなく、『北溟雑誌』63号（1893年）

の「各地通信」という欄に、「鷺崎の内茂浦は本州第一の鮑の繁殖地なるが先頃より千葉県下の小谷源之助と云ふ人來り鮑製造所を設け頻に改良品を製造し居るよし」との記載が見つかり、源之助が佐渡の鷺崎に乾鮑の製造所を設けた事実が明らかになった。

1887年(明治20)に佐渡で創刊された『北溟雑誌』には、水産伝習所第1回卒業生である森知幾という人物が多数の論説や記事に関わっていた。佐渡出身の森は、源之助より3歳上、仲治郎より8歳上である。源之助と森はどこかで知り合い、佐渡鷺崎での採鮑業や乾鮑製造につながったと推察される。

『森知幾 地方自治・分権の先駆』(森幾著・1988年)を参考に彼の行動を辿り、金澤屋や源之助との関わりを見てみたい。森は1864年(元治元)に佐渡の相川で生まれ、20歳で上京している。東京物理学校や水産伝習所だけでなく、明治法律学校でも学んだマルチな人物である。そこでは内村鑑三や幸徳秋水らと交流し、キリスト教や社会主義思想を学んだ。佐渡に戻ってから自由民権運動や部落解放運動の若きリーダーとして活躍したという。佐渡新聞を創刊し、部落解放のための学校を開設して校主となり、後には相川町長まで務めている。清三郎や源之助、仲治郎は森知幾の理論や実践力に驚いたであろう。

なかでも、水産伝習所第1回卒業という専門家として、佐渡の水産界で果たした役割は目を見張るものがある。1890年(明治23)、水産伝習所長の^{せきざわあけきよ}関澤明清の実弟である、水産伝習所教員^{かぶらぎよ さお}鏑木余三男が佐渡で講演をした。その時に、鏑木は佐渡三郡の雑太郡長に佐渡水産伝習所の設立を進言したことから水産試業場開設につながり、在京の森知幾は職員となるよう要請されたという。翌年帰郷した26歳の森は、佐渡水産試業場助手となったものの1年で辞した。「佐渡で起こすべき事業は何か」という懸賞論文を書き、「世界各国との競争の上でも、佐渡にとって将来性のある産業は水産業であり、貧窮を脱して他地方と対等の権利を維持し独立するには、地

勢的にも経済的にも、水産業が最も有望である。…水産こそ、民の段階では、最も惨めな漁民を救い…」と述べている。具体的な施策として「漁業保険会社や共同製造所の設立」、そのために「模範漁業を起こすこと。海府新道を開くこと。漁場探求、灯台・測候所の設置、水難救済所、水産教育、水産陳列所、水産家養成」を提案し、その実現のために森は奔走する。

この論文は、源之助・仲治郎兄弟にとって、水産人としての心構えや生き方を学んでいくきっかけになったと思われる。実際に、「模範漁業を起こすこと」という提言は、金澤屋や源之助の協力によって実現した森の理論とともに、その行動力・実践力に源之助は驚いたであろう。

森が農商務省から水産調査報告員を委嘱された1892年(明治25)、佐渡水産会(会員300名)の設立に関わり、教師兼事務員に選任された。佐渡水産会では森知幾が、安房から謀計網、流網、マグロ縄、サメ縄などを取り寄せ、また熟練の漁師を雇って「模範漁業」を実施すると決定した。

この事業計画は森と源之助・仲治郎によって作られ、翌年6月に実施された。この模範漁業では、根本村の漁師が森とともに水産会の漁船に乗り込み、コマセの小エビを捕った後に、それを餌に各地でアジを網獲した。根本村の漁師たちが参画したことは、清三郎とたよの書簡にも記載されている。安房の漁業史には今のところ見当たらないが、画期的な出来事だったといえる。

こうして源之助らと森との出会いは、佐渡と安房の漁業交流になり、アワビ事業にも繋がった。森の人格や生き方は、渡米前の源之助や仲治郎に強い刺激を与えたと考えられる。

4. 源之助の二度の結婚

源之助は、先妻となる田中リンに佐渡で出会う。森知幾が源之助に紹介した可能性も考えられる。リンは1873年(明治6)11月12日、新潟県佐渡郡河原田諏訪町141番地で、田中善三郎・ヨシの二女として出生した。

ほとんど平仮名で書かれた女性の書簡があり、

内容からリンのものと推定した。「…とうねんはるからぶらぶらとやすみおり、旧七月方とこにつき…川原田ゑまいりおり候…じぶんのみもかなわず、こゑもとどかず…もりさんハしんばいまいつたとまうし…」とあり、リンの出身地名の川原田や「もりさん」という名前、病身である文言が書かれている。

また、他の書簡から清三郎・たよ夫妻の親戚関係や医師との対応、そして病気のリンへの気遣いなどが見られ、東京で治療していたことがわかる。「…せき出又いきゝれいたし、誠に誠にこまり入候、しんばし初ミなミな様一同相だんいたし、多カキさんニねがう事ニ候処、多カキ先生…しんばしおとくより殿方御手紙いたゝき…」と、書簡には、新橋の福原有信・徳夫妻に相談し、高木たかき兼寛かねひろ医師の診察を受ける旨記載がある。

森大屋家と親戚である福原の兄が住職を務める三念寺が、里見氏家臣団ネットワークの寄り合いの場であったと推定できる文書が見つかり、東京でのつながりも強いとわかった。

高木医師は1891年(明治24)に東京病院を開設しているので、前述の書簡は1892年(明治25)から源之助が渡米した1907年(明治30)の間にリンが結核になった可能性がある。

源之助は1897年(明治30)9月9日に渡米し、1899年(明治32)9月5日に本人不在のまま婚姻届を出し入籍している。その背景にはリンの病と森知幾との関係があったと考えられる。

リンの病状悪化に伴い、源之助は1901年(明治34)10月31日に一時帰国したが、看病の甲斐なく、翌1902年(明治35)9月3日に佐渡で亡くなった。根本東墓地の金澤屋一族の墓域には「佐渡国河原田町 田中家産 源之助妻俗名リン行年三十一」と刻んだ墓碑が確認される。

妻リンを亡くし、再び渡米する源之助を案じた両親の勧めがあったと思われるが、1902年(明治35)12月12日、源之助は鴨川の田代ふくと再婚している。父である医師の田代謙斎は前年に亡くなっているが、福原有信とは医学の旧知であったことから、紹介されたのかもしれない。

ふくは妊娠し、源之助は翌1903年(明治36)3月17日に単身で再渡米する。同年12月4日に長男英雄が誕生、1904年(明治37)8月16日にふくと英雄は渡米した。

5. 「金澤屋」の飛躍～乾鮑製造と岸上きしのうえ かまきち鎌吉

明治初期の殖産興業において、農商務省は水産加工品のいくつかを重要貿易品に指定した。なかでも清国貿易においては、乾鮑などが外貨獲得の重要輸出品として位置づけられ、主に横浜に送られて清国の貿易商に販売されていた。なかには粗製品もあり悪評であったので、1882年(明治15)に設立された大日本水産会が品質向上を訴えてきた。1885年(明治18)、千葉県夷隅郡の沖合でアワビが多数生息する岩礁群(後に「器械根」という)が発見され、多数の器械船が殺到して乱獲になり、乾鮑は粗製乱造となった。

水産業の近代化に向けて、海外の博覧会視察などを通じて漁業の技能技術を導入するとともに、水産加工業者には品質向上や新製品の開発を呼びかけた。千葉県や安房地域はそのことを受け止め、小谷清三郎は呼応した一人であった。

水産貿易に力を入れるため、全国各地の水産関係者から1万数千点を出品させ、1883年(明治16)に第1回水産博覧会が開催された。来覧者は23万人といわれ、優秀な技能技術や水産加工品を全国に知らせるだけでなく、他地域への啓蒙普及する役割を果たしていった。

根本村の38歳の小谷清三郎は乾鮑を出品し、褒状を授与された。審査講評には「製法宜キヲ得テ品位佳良ナルニ由リ清国人ノ嗜好ニ適ス」と記され、清国に輸出する乾鮑に適していると、農商務省からお墨付きを得たことは注目に値する。隣の滝口からも3人が褒状を授与された。全国で乾鮑の授賞31のうち、根本村と滝口村(後に合併し長尾村)という狭い地域から4人が選ばれたことで、安房地域の高い技術レベルが全国に周知される機会となった。清三郎は、1886年(明治19)の大日本水産会主催の共進会でも一

等賞を受け、さらには1890年(明治23)の内国勸業博覧会でも入賞し、農商務省において乾鮑製造でよく知られる人物となった。

貿易品に相応しい品質の加工製造技術者や指導者が不足していたため、養成機関の設置に迫られた。そこで1888年(明治21)に創設されたのが大日本水産会水産伝習所(後の水産講習所・東京水産大学・東京海洋大学)である。近代的な漁業指導者の養成が急がれるなか、関澤明清は、農商務省事務官としてウィーンやフィラデルフィアの万博に出向き、サケ・マスの人工孵化や捕鯨銃の導入など、欧米の近代的な水産技術を日本にもたらす重要な役割を果たしていた。大日本水産会が創設した水産伝習所の初代所長となり、後進の育成に精力を注いでいった。

二男の小谷仲治郎は1872年(明治5)に生まれ、根本尋常小学校卒業後16歳で上京し、佐野英語学校に1年間学んだ。1890年(明治23)2月に水産伝習所予科に入学し、本科第3回生に進んだ。伝習所の関係者には、清三郎が水産博覧会で乾鮑の褒状を受賞したことを知っている者や、金澤屋とすでに取引している事業者もいた。代表的な人物は、海産物問屋の安達重助や渡辺福三郎、靱山半三郎などである。

仲治郎は在学中からすでに、5歳上の兄源之助とともに、東京における金澤屋の事業に加わっていた。伝習所の教員をはじめ同級生や同窓生との交友関係は、金澤屋にとっても重要なネットワークになっていったことが書簡からわかる。源之助もまた、仲治郎の人脈と親交を深めながら、積極的に金澤屋の商取引につなげていった。1890年(明治23)8月、水産伝習所本科の第2回生が白浜村(根本の近隣村)で夏期実習を開いた際、書記の石原重資から仲治郎を通じて協力の要請があった。清三郎が乾鮑製造を指導したと推察される。

翌春、仲治郎から清三郎や源之助に宛てた書簡には、伝習所教員の岡村金太郎から根本海岸の海藻採取に協力してほしい旨が記されていた。後に海藻学の第一人者になる岡村の調査研究過

程において、清三郎や金澤屋の器械潜水による調査協力は重要であった。

1897年(明治30)に大日本水産会水産伝習所は官立水産講習所となり、1901年(明治34)に館山実習場が開設された。岡村の調査研究はさらに進み世界的な評価を得ていく。海藻はアワビの餌でもあり、仲治郎にとっても岡村の海藻研究を学んだことは、渡米後の器械採鮑業の調査に活かされたと考えられる。清三郎の乾鮑製造とともに、農商務省は源之助や仲治郎にも期待をかけていたと思われる。

仲治郎が、卒業後の1892年(明治25)頃から本格的に家業に専念しようとしていた矢先、安房の採鮑業全体にダメージを与える重大問題が発生した。

『安房郡水産沿革史』(1914年)の「鮑漁業ノ沿革」によると「明治二十五年頃ヨリ三十四五年迄約十ヶ年間漸次各浦トモ磯焼ノ害發生シタルニ・酷補濫獲シタル結果一時ハ其ノ種族ヲ絶スニ至リ・」とある。磯焼けと濫獲によりアワビ生産が減少し、高額な資本がかかる器械採鮑業は資金回収が難しくなる状況となった。安房の外房沿岸の磯根漁業にとって緊急事態であり、根本村でもアワビ生産が低下し、対応が迫られた。『水産調査報告』(水産調査所・明治29年)には、1895年(明治28)10月に根本の採鮑営業人森精吉郎らはアワビが激減したので採鮑期間を特別に延期してほしいと千葉県当局に要望書を出したとある。

仲治郎が水産伝習所在学中に教員であった岸上謙吉は、水産重要生物を中心に動物分類学の基礎を築いた学者である。帝国大学理科大学動物学科入学後、日本動物学の第一人者であるみのさくかきち箕作佳吉教授に師事し、1889年(明治22)に卒業した。その年に設立された水産伝習所の動物発生学の教員として採用され、内村鑑三や岡村金太郎らと同僚であった。1893年(明治26)に発足した農商務省水産調査所の主任技師として、東京湾をはじめ日本各地の水産生物の分類・分布・発生調査及び繁殖(養殖)技術の研究に従事

した。アワビの調査研究では日本の権威であり、金澤屋の協力により取り組んだ根本のアワビの成長過程の調査研究は、『水産調査報告(第四卷)第貳冊』(農商務省水産調査所・1896年)の論文「あわび研究第二報」の「介殻成長ノ度」や「發生及産卵期」の項は重要な内容である。渡米後におこったアワビ保護をめぐる漁獲規制問題では、仲治郎が住民の訴えに反論する論拠とした調査研究であった。

当時の書簡には「…明治廿六年八月技手見習佐々木沖太郎ヲ安房國根本ニ遣ハシ…明治廿七年十二月潜水夫ヲシテ…」などと書かれていた。

6. 渡米前に小谷兄弟が学んだ米国水産情報

岸上鎌吉の論文「あわび研究第一報」(『水産調査報告(第三卷)第壹 第貳冊』・農商務省水産調査所・1895年)には、「外國ニ於ケルあはび漁業」という小論がある。渡米前の源之助や仲治郎が熟読し、調査研究の基本文献にしたと思われる。そこには「あわびハ七十餘種アリ東洋、南洋、歐洲、及ビ北米太平洋岸ニ饒産ス…北太平洋岸ニテハ桑港近傍トス…米國水産調査報告ニヨルニ北太平洋沿岸ノあわび漁業ハ千八百七十九年ニハ肉及ビ介殻ヨリ十三万弗許ノ収獲アリ…千八百八十八年ニハ其収獲實ニ三百万弗ニ達セリ、然レドモ志那人ノ貪慾ナル濫獲シテ遂ニ諸所ノ漁場ヲ荒廢ニ歸セシメタリト云ウ、同國ニテハ介殻ノ方肉ヨリモ貴シ、千八百七十九年ノ報告ニヨレバ介殻ノ一噸四十弗及至九十弗、肉ハ一磅凡ソ五仙ノ割合ナリト云ウ、要スルニ外國あわび漁業ハ未ダ幼稚ニシテ捕獲法等ニ至リテハ未ダ本邦ノ右ニ出ヅルモノナキガ如シ、種類ハ本邦産ノモノト異ナレリ。明治廿七年十一月」とあり、「外國あわび漁業ハ未ダ幼稚ニシテ捕獲法等ニ至リテハ未ダ本邦ノ右ニ出ヅルモノナキ」と岸上は述べている。

そして注目されるのが「北太平洋岸ニテハ桑港近傍トス…米國水産調査報告ニヨルニ北太平洋沿岸ノあわび漁業」という部分には「米國水産調査報告ニヨル」とあり、岸上は当然、調べてい

たはずで、源之助や仲治郎も目を通して、渡米後の調査研究に活用したと考えられる。

同時期に出版された『輸出重要品要覧 水産之部 乾鮑』(農商務省農務局・1895年)をみると、「十四 外国産地ノ状況」の「北米合衆国」には「…合衆國漁夫調査報告中ダヴィド,エス,ヂョルダン氏ノ説ヲ摘譯シタルモノ…」とあり、米国水産業の資料としてスタンフォード大学初代学長の魚類学者デイヴィット・スター・ジョーダンの説を引用している。それは『1880年、デイヴィット・スター・ジョーダンが太平洋沿岸の漁業調査の一環として、アメリカのために作成した報告書』(1880年)だとわかった。実際にモントレイやポイントロボスを訪れ、漁村の様子や漁業関係の調査をまとめた報告書として、米国水産局の基本的な文献になっていく。

また、米国漁業・水産委員会の報告書『米国の漁業および水産業』(米国漁業・水産委員会委員長および第10回国勢調査管理者の協力により準備作成・1887年)には「…鮑漁業に関する最新の情報と部分的な統計は、国勢調査局のデイヴィッド・スター・ジョーダンとルッキングストン両氏の1879年の調査によってもたらされた鮑の生産地は、サンフランシスコから南境までのカリフォルニア沿岸、下カリフォルニアの半島とメキシコの対岸…」とあり、1879年(明治12)の調査資料にはモントレイなどのアワビ漁だけではなく、「1879年鮑漁の概要数」が具体的に表記されていることは注目に値する。

日本の農商務省水産調査所は、米国政府に関わる水産報告書やジョーダン論文などを翻訳し、日本の水産政策に活用していたという指摘はこれまでどこにもなかった。

房総から渡米したアワビ移民の背景には、魚類学者ジョーダン博士と農商務省、東京帝国大学との調査研究における交流関係があったことを前提に、モントレイ半島やポイントロボスでのアワビ状況を踏まえる必要がある。渡米前の小谷兄弟は岸上の論文を読んだり、本人から直接、現地のアワビ漁の実態を教授されたと考え

てもよいかもしれない。

渡米直後、排日運動に伴うアワビ資源保護問題や漁獲規制問題がおきた。小谷兄弟は岸上論文を念頭におき、科学的な見地から冷静な対応姿勢を発揮し、共同事業者となる A・M・アーレンを驚かすほど大きな信頼を勝ち得ていく。

当時、米国の水産情報が日本側にも頻繁に紹介されるようになる。1896年(明治29)の『大日本水産会会報』によると、米国海洋調査船アルバトロス号調査員らのための懇親会が東京芝の紅葉館で開催され、水産調査所や水産伝習所の職員らと交流し、後日水産伝習所において講演会があったという。通訳をした水産調査所技手の大瀧圭之助は、岸上鎌吉の部下であり、スタンフォード大学に留学してジョーダン博士から直接学んだ魚類学者である。この席には関澤明清や岸上鎌吉ら水産界の重鎮が参加していたと考えられる。

この懇親会場となった紅葉館は、政府高官が利用する社交場であった。支配人の野辺地尚義のへじなおよしは、明治政府と深い関わりがあり、娘納子の夫はアメリカ在住の野田音三郎であった。

野田は1889年(明治22)に渡米し、モントレ一周辺の広大な土地の開発を進めていた。パンフィック・インブループメント会社に雇われ、1895年(明治28)にワッソビルで森林伐採に従事した時、モンレー湾の豊富な水産資源の存在に気付いたという。

『在米日本人史』(在米日本人会事蹟保存部編・1940年)によれば、野田はモンレーの豊かなアワビ資源に最初に気づき、乾鮑製造の指導者の派遣を農商務省に働きかけるきっかけをつくった人物とされる。野田から岳父の野辺地にあてた手紙のなかに、農商務省への口利きを求める文言があっても不思議ではない。よく紅葉館で会合をする農商務省の官僚へ支配人から伝えることは簡単であったろうと思われる。

野田の話を受けた農商務省はまず、器械潜水採鮑業と乾鮑製造の第一人者である小谷清三郎に相談したのではないだろうか。そして岸上鎌

吉は、源之助・仲治郎のアワビ研究や乾鮑製造について太鼓判を押したに違いない。

なお、当時の金澤屋の経営状況はまったく不明であるが、日清戦争後の清国貿易や、磯焼けによる器械採鮑業の停滞という問題のなか、乾鮑製造販売の取扱いに慎重を期す状況にあったと考えられる。当時の『官報』から農商務省が水産業の重要貿易品目のあり方、国内外の漁業生産地と輸出入先の開拓、水産加工品の将来性などを検討していることが読み取れる。

7. 椎原報告書から

小谷兄弟とアーレンの取り組みをみる

近年、農商務省海外実業練習生しいはらひろおの椎原廣男が1908年(明治41)7月に提出した「米国に於ける本邦採鮑業者の状態並びに経営法に就いて」という公式報告書を見つけた。

椎原は水産講習所第7回卒業生で、仲治郎の後輩にあたるが、調査時期は仲治郎の帰国後なので、源之助から聞き取りをしてまとめたものである。これは『農商務省商工彙報 明治四十一年臨時増刊第十號』(1908年)に掲載された。今のところ、アメリカ側にはない貴重な報告書といえる。

海外実業練習生としての初任地はサンフランシスコで、当初の練習科目は「海藻ノ利用法及販路」であった。椎原は水産講習所養殖科で海藻学の世界的権威の岡村金太郎から指導を受けており、アワビの餌である海藻について日本やアメリカなどの植生を調査研究していた。

椎原が渡米前に「海藻ノ利用法及販路」を練習科目にしたいと言ったなら、岡本は必ずモンレーやポイントロボスの海藻のことと、小谷兄弟のことを伝えたにちがいない。

椎原が「海藻ノ利用法及販路」から「米国に於ける本邦採鮑業者の状態並びに経営法に就いて」という練習科目に変更した理由を考えると、激しさを増す排日のなかで移民社会問題は重要と考え、小谷兄弟のアワビ事業を分析することにしたと思われる。

この報告書は、「1.採鮑業の沿革／2.小谷採鮑製造所／3.加州沿岸に於ける鮑の分布／4.採鮑の方法／5.製法の一般／6.労銀／7.販路の状況／8.製造売上高／9.本邦仲買業者の不徳／10.採鮑業の将来に就て」という章立てで、聞き取りと調査研究をまとめ、米国の水産調査委員ウィルコックスの報告書も引用している。

1.採鮑業の沿革では、モンレー付近における日本人の採鮑業は、1897年(明治30)に野田音三郎が和歌山県の漁夫4名とともに訪れ、パシフィック・グローブの灯台付近において採鮑を開始し、翌98年(明治31)2月、千葉県人小谷源之助と弟の小谷仲治郎は、ポイントロボスにおいて採鮑業を始めた。アーレンと共同して採鮑業は素潜り潜水から、同年11月になって器械潜水具1台を使用し、翌年にもう1台増やしておこなった、とある。

1907年(明治40)に潜水器使用の採鮑禁止条例が公布され、手鉈での採鮑となったが、カリフォルニア州沿岸における採鮑業は小谷兄弟が一手に引き受け、アーレンと小谷兄弟との共同経営のポイントロボス缶詰会社のみと言っても過言ではないという。

2.小谷採鮑製造所の章では、「アーレンと合同し、ポイントロボス缶詰会社の名義をもって、アーレンを支配人となし、小谷両氏は単に使用人の名義を仮用し」とあり、1904年(明治37)の米国側の報告書にも「1名の米人支配人と12名の日本人の使用人とを有す」と記載がある旨述べている。これは米国における「邦人経営法の最良手段」であり、白人からの様々な妨害を避ける手法として、椎原は高く評価している。小谷兄弟とアーレンとの共同経営は素晴らしいパートナーシップで成り立っていたことがわかる。

4.採鮑の方法では、渡米初期は裸体潜水であったが、1898年(明治31)11月11日より潜水器1台を使用し、翌年さらに1台を増しており、潜水器1台あたり8人を要するという。

はじめは米国製の潜水器を使用していたが、品質が悪く各部のゴム質も良くないので亀裂を

生じた。そこで日本から取り寄せると値段が半額になり、品質も良好でゴム質も良く、比較的長期間の使用に耐え、約1年間使用できた。

この部分は、源之助が父清三郎に手紙を書いて、器械潜水の装置類や深海潜水用具類を依頼したと、源之助の三男省三^{せいぞう}が証言しており、事実であった可能性が高い。

7.販路の状況および9.本邦仲買業者の不得の章によると、小谷兄弟は乾鮑製造を始めたときから、日本人仲買商による清国や韓国への販売を希望していた。横浜・神戸・長崎等で仲買人を探し、長崎市^{せいぞう}の海産物仲買人と特約し、品質のよい乾鮑を、1898年(明治31)4月28日に日本へ第1回目の出荷をした。1回の送量20箱の出荷は10回に及んだ。しかし、仲買人の不払いが多額となり、催促しても連絡が途絶え、結局は大損を被ることになったため、取引を止めた。その後は米国内だけの乾鮑出荷になったとわかる。

10.採鮑業の将来に就ての章をみると、北米太平洋沿岸における日本人の経営では、おそらく小谷の採鮑業の右に出るものはない。さまざまな取締り規則の改正があつて、事業に支障が出るなかでも業績を伸ばしている。

当地の経営者の多くは白人とほとんど没交渉であり、融和する者は少ない。日本植民地の観を呈し、他の嫉妬を招き、排斥を叫ばれている。決して策を凝らしたのではなく、白人を共同経営者にするか、あるいは白人を使用人にするか、どちらにしても、その事業については白人とよく話し合つて決める以外にないという。

異国で暮らすには、お互いの立場を理解し、譲り合い、パートナーシップを培う姿勢が大切である。椎原廣男がポイントロボスを訪れ、小谷源之助から聞き取りをしたのは、排日問題が高まる時期であった。事業経営における困難や苦悩ばかりでなく、共同経営の理念や、アーレンや妻サティらと家族ぐるみで深い信頼関係を築き、苦闘を乗り越えてきた話も聞いたであろう。具体的に記載されてはいないが、椎原は驚き、大きく感銘を受けたのではないかと思われる。